

■■受験対策ミニ講座 21号■■

2月に入り暦の上ではもう“春”ですね。先月末、国家試験を受けた方、お疲れ様でした。全力を尽くされたことと思います。試験準備期間中に我慢していたコンサートに行く、温泉につかる、昼寝をする、読みたかった本を読む等々、ストレスを解消して、次へのステップとしてください。

このニュースは、国家試験のあとも事務手続きなどの必要な情報をお伝えしますので、もうしばらくお付き合いください。

■Plus Column・・・

【本・漫画を読もう！】

試験が終わってホッとしている方、来年に向けて英気を養っている方に、今回は読書案内をしたいと思います。私たちの仕事では「利用者に寄り添う」ことが何よりも大切と言われます。「人に寄り添う」ためには人間を深く理解する必要があり、人間理解の方法として研究されている心理学、社会学、医学などが社会福祉士養成の科目となっているわけですね。

ここでは少し角度を変えて、利用者に近づく方法として「自伝を読む」という方法をご紹介しますと思います。近年、特に「自閉症・発達障害」の分野では次々と新しい本が出版されています。ご本人自身は何を感じ、どんな気持ちでいるのだろうか...それを雄弁に語っている作品を以下にご紹介します。

嚙矢（こうし）は1980年代にオーストラリアのドナ・ウイリアムスが著した『自閉症だった私へ』（新潮社）と言われています。続編も含めて多数の作品の翻訳があります。アメリカのテンプル・グラディン『我、自閉症に生まれて』（学研）も、幼い頃のこと、大人になって研究者として社会的な活動をするまでのことがつづられた自伝として知られています。

日本で2007年に出版された東田直樹『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』（エスコアール出版）も世界各国で翻訳されて話題となっています。村上由美『アスペルガーの館』（講談社2012年）には、「あなたは自閉症」と言われて育った幼い頃の体験から、言語聴覚士となって活動する姿、結婚生活などがつづられています。『片付けられない女たち』など多数の訳書がある翻訳家ニキリンコにも『教えて私の脳みそのかたち』（花風社2002年）など、たくさんの対談集や自伝的な著書があり、広く読まれています。

これらの自伝を読むうちに、利用者の行動がなんとなく理解できるように感じられることがありました。例えば「散歩の途中で突然、道路に飛び出して道に寝転ぶ」という行動のある人がいました。それは「危険な“問題行動”」と記録されていたのですが、よく見ていると、一心に走ってマンホールに頬を擦り付けるようにして寝転んでいるのです。私はいくつかの自伝の中に、音に対する敏感さについて書かれていたことに気づき、「彼はもしかしたらマンホールの下を流れる水の音を聞いていたのではないか」と考えるようになりました。そのことがわかっていれば、共感しながら「水の音が聞きたいんですね。でも危ないから信号が変わってから行きましょうね」と話しかけることができたのに...と悔やまれてなりません。

自伝作品ではないのですが、2001年から漫画雑誌『フォアミセス』に掲載された『光とともに』（戸部けいこ 秋田書店）は、自閉症の子どもとその家族をていねいに取材して描かれた感動作で、テレビドラマにもなりました。同じく漫画雑誌『ビッグコミック』掲載の『どんぐりの家』（山本おさむ 小学館）も、重複障害や自閉症などの子どもたちとその家族の姿が取材された優れた漫画作品で、アニメーション映画も製作されました。

いわゆる“試験勉強”から脱して、知識・見識を広げることは、“本当の勉強”になっていくことでしょう。

これから試験を受ける方にとっても、試験勉強のモチベーションとなると思います。ぜひ、いろいろな方法で人間理解を深めていただきたいと思います。

■Back Number

過去のバックナンバーはこちら→http://www.aigo.or.jp/yoseijo/?page_id=2686

※掲載内容の転載・再配布はご遠慮ください。

※メール内容に対する個別の対応は行っておりません。

※問い合わせ等については社会福祉士養成所ホームページより行えます。

〒105-0013 東京都港区浜松町 2-7-19KDX 浜松町ビル 6F

Copyright2016 YoseijoNewsplus

発行者： 公益財団法人 日本知的障害者福祉協会